謠曲　六

生島
朝長
姨捨
三井寺
阿漕

182
22
157

生鳥　共廿二本

朝長

娘拾[illegible]

三升寺

阿曹

六

竹生嶋

（次第）竹に生るゝ鶯の〱竹生嶋ま
うで急かん（詞）抑是ハ延喜の聖
代に仕へ奉る臣下なり扨も江
州竹生嶋の明神ハれいしんにて
御座候程に此度君に御暇を申して

今竹生嶋に参詣仕り候　四の宮
や河原の宮ゐ末はやき〳〵名も
はしり井の水の月くもらぬ御代よ
逢坂乃関の宮居をふし拝み山
越えちかき志賀の里鳰の浦にも着
にけり〳〵　急候程に江州志賀の
浦に着て候　あれを見れば釣舟の
来り候暫らく相待便船をこは
ゞやと存候　面白やころは弥生
の半ばなれば波もうらゝに海の
おも　霞わたれるあさぼらけ
長閑にかよふ舟の道うきわさとなき世

一二┐二二┐ニリ┐ニテサン二二二二二、二、一

なみだにくれ　暮は此浦里にとゞく

一、二、一二一一一一一二、二六二

あれ〳〵明くれふかうつゝの鐘

一二、一二一┐下一一二、二一一

をうくしておもひとつをたもけやせん

一、二、┐二、、二二一、二┐

とわひ人の傑と浪留にあけくれて

一二、┐ニリ一一、┐ニリ┐

世をわするゝ袖のうけまウ　よし〳〵

二一、二、┐二一一、、一二

同しわさなるゝ世にとえとうかは

、、志ら、三三┐一二三、一三三

うみのウ名所おわれ教くふウツく

浦二、二一、二一、二一、二一二

浦山みてなかむれは志賀ヤの都花

二┐二┐一下、二一二┐一九一二一

その昔ならぬ山桜海棠ツの合

一下一、一、二、一一一一九┐

乃ふかよるひやきけしも世て楽

下さ、┐三、早附

とろく　いるは音かる秋ふひ

ニテ附

んせんゆきうかふ　音はわろし舟

にてもなし御覧候へ釣舟にて候よ
ワキ こなたも釣舟と見えてあればこそびん
せんとは申せ是は竹生島に始めてさ
んけいの者なりちかひの舟にのるべき
一ヽ
なり　シテ 実此所は霊地にてあゆみを
はこふ人をとかく申さば所よ

も違又ハ非道ものりがたし
一ニヽニヽ一一一ニ一ヽニヽニ一
らば此舟とまいらせん　嬉しやさてハ
三ニ一ニヽニヽヽニ一ニ一ヽ
誓ひの舟のり法の力とおぼへたり
シテ けふハことさら長閑にて心にかゝる風
ニヽ一ニヽニ一ニヽニヽ
もなし　名にそさう波や声うれ
浦よ　れゝらあるハ都人かいろうや

が舟にやうらゝにて浦〱とかすみわたるや
所ハうみの上国ハあふみの江ふ
ちかき山〱の春なれや花ハさなから
白雪のふるかのこるか時しらぬ山ハ
都の冨士なれや猶さへかへる春の
日ふ比良の根おろしふくとても

沖こく舟ハよもつきし旅のならひ
の思ハすも雲井のよそふ見し人
もおなしふねふなれし衣浦を隔て
行ほとふ竹生嶋もみへたりや
緑樹陰しつむて魚木ふのほる
氣色あり月海上ふうかむてハ

うさきも浪をはしるか面白の嶋
のけしきや　（シテ詞）船か着て候あかり
候へ　（ワキ詞）あらうれしや頓て御参
り候へし　（シテ）此尉か御しるへ申さ
うするならば是社弁才天にて候
よく御祈念候へ　（ワキ）承およひし

るゝよりもいやまさりて有難候ふ
しきやな此嶋ハ女人禁制とこそ
承て候ふにあれ成女人ハ何とて参
られて候そ　（シテ）それハしらぬ人の申事
かたしけなくも此嶋ハ九生如来の御再誕
なれハことに女人こそまいるへけれ

なかそれよりもかゑりのを　弁才天ハ
女躰にてその神徳もあらた
なる天女とげんじおはしませハ女
人とてへだてなし唯しらぬ人の
ことばなり　かゝる悲願をおこし
て正覚年ひさししゝつうわうの
上ゲテ　実
古へより利生更におこたらハ
くかひとうきひもあらはそ嶋のまへ
信を得りによりなるあ波に小舟ハ
人間にあらずとて社壇のとびらを
おしひらき御殿に入らせたまひけれ
翁も水中に入るとみしか白波の

立くる秋の此海の あらしをと云
捨て又浪にいゝ世なまひなり
此殿主さりかめのとうして日月ひ
うりか八居にて山々出るらく
かそあくりまうそかゝりけれとさ
抑にはの此浦にかむて浪とらやま
ひ出とまりの舞女天乙の秋なる也
其時に天の楽学しはふ
りくる者よの月にかゝやく乙女
のなりとうへとしくもあかりしけや
抑花乃舞楽を時とよく
月をくわる海つゝに浪風吹

にめいどうして下かいのりうじんあ
らはれたり龍神こしやうにしゆつ
げんしてひかりもかゝやくきん
銀しゆぎよくをかのまれ人にあた
ふるけしきありがたかりけるきどく
かな本より衆生さい度のち
かひさま〳〵なれば或は天
女のかたちをげんじ有縁の衆生
の所願をかなへ又は下界の龍神
となつて国土をしづめちかひをあら
はし天女は宮中にいらせ給へば
龍神は則ち湖水にひぎやうし

てばとけそ水とうへして天地に
むかう大蛇のかしら天地にむかう
かくて大じやはうちとられば鎮めふこ
ろぞべふに久敷

右之本者観世太夫章句真本令版行畢
正徳六丙申歳弥生
尓来荏苒数十年ノ星霜ヲ経ルニ従ヒ改正増補ヲ加ヘシモ印刷ニ附セサレハ之ヲ世ニ公ニスル能ハサルヲ悲ミ今般
宮内省　御用達観世清孝ノ校合ヲ以テ玆ニ之ヲ上梓スト云

明治十三年三月三十日出板御届
同　年五月　刻成発兌
定價貳錢
京都府平民
出版人　檜常介
上京第三十組二条通寺町西入
丁子屋町三十五番地

出版人（丁子屋町三十三番地　下京第三十[illegible]區寺町通[illegible]西入）京都府平民　檜常介

同年五月　日刻成發兌

明治十三年三月三十日出版御届

宮内省御用達觀世清孝ノ校合ヲ以テ茲ニ之ヲ上梓スト云

[illegible]ニ[illegible]リ世ニ流布スルモ能ハサリシヨリ遂ニ今般

示来法并数十年ノ星霜ヲ経ルニ従ヒ改正増補ヲ加ヘ

正徳六丙申歳　[illegible]

右之本者觀世太夫章句真本令版行畢

朝長

ワキ
是ハ嵯峨清涼寺より出たる僧にて候。扨も此度平治の乱れに義朝都をおちさせ給へハ中にも大夫進朝長ハ。みのゝ国あをはかの宿にて御自害し果

の[illegible]るよし[illegible]
[illegible]けれ者にて候ふ
急ぎかの所に下り御跡をも
弔ひ申さんと思ひ立ちては
近江路や瀬田の長橋うち渡
[illegible]行すゑはかゝみ山老
蘇の森を打ち過ぎて末に伊吹
の山風の不破の関路と[illegible]
あをはかの宿に着きにけり
[illegible]松風や[illegible]
[illegible]暮れぬらん　是はあをはか
の長者[illegible]の

泡だられきんふくひふもど結
とするはならひならぬ是そ王
さらぬらのも人乃那けれと多
のら人ながら流の雨もとくすね
ろく袖の花露ほどにはかなくさ
言乃葉もなくなかりけるなり

梢乃那忠りれけともしあ雲
月日の數ハ積りて雲居に
中春はきまりけり世をへだて
まる淚今はたやどれども袖に
さらは夢かとも面影のみ
なをも見えつゝありし紅

一一、、、、一一一、、一、、、

とをもひ出るも涙ぐましやく

シテ
ふしぎやなか此の墓所へ参りなが

らそれは七日〳〵に参れば御か

その縁者も見えず旅人と

見えさせ給ふ御僧の涙をなが

しねんごろに弔ひ給ふはいか

なる人にて候ぞ　ワキ　さん

候是は敦長の御ゆかりの者に

て候が御跡をとむらひ申さんとて

まかり参りて候　シテ　御ゆかりとは

なつかしや敦長の御ゆかり

の人にて候はぞ　ワキ　是は

朝長の御めのと何某と申すもの
にて候ひしが世をすてゝみて御いと
まゝうりだらや十ヶ年にあまり
が様の御あとなりくはぞくにも
我りが孫とむつひ申候へは
ひつきともかん数の田かりとへ

出家の身とも思ふ様は料簡
公御に身をやつし候ひく
な侍りては　女「扨はさりわたさ
ろはしくげそれぞめしす
らめがわゝゝも一枚の御宿りま
がくなく自害し果まへばだく

夕れ秋さのよくふそが和ふと
むかひあふ色ハ実頼なし
や秋さくらどもとらえ後の契
ごしも三世なれらう妻も
一樹のかけ乃宿り他生の縁と
叓時ハ夫婦とても二世の契り

れハふしをたらひふ変ふきそ
吊らふ秋色　朝長色　飛乃
縁乃下にもあひふかふちろれく
縦の志らしが草乃かけの芸壁
ろ糸ハ名のみして古条のよれ芸
草ハかれろう秋の流芽乃系かたの

やはり此孫まて三代は実は北部の

夕へより一片の雲となりきえ

しかは色もかたちも形見孫

とあそれぬるし　いふ事

は頼長の四男経の子孫にて

く頼つく四男巳にて　中ふつ

けて痛りしやくれし年比八日

乃板ふ入さし門をあつけなくた

らく事は継めうんと思ひし

ふ孫国敵と作られし後ふつと

第の代まへは武具したる人見

人らふ入まい義朝四男子孫

田舎王丸とやらんハわらハと我
ことほしめバ唯かハ河原よめ
されバ彼乃うつゝへ御前なへ
きと取りバ又経長ハ都大炊よ
てひさの日とめさせバそのくわう
らひきひしうバ我又人静まう

く後経長の御影にそ宙安たハ
孫従仏くと二声のまゝ猿因幾
来りぞさいうに経長乃御安うい
ゆとかきせきへバ義経かと後き
御覧をれハ平乃らさきねも紅
ふそみくがとおくらまね[illegible]

なりがたき義経が身として自害し
たまふを待ましなば経長つくさ
れ下よりはさんぬれば大岩まくひ
きろ足を持たせばとてふなんぞふ
はひしを馬にかゝら鼻までは肉
いりぬべくも今は一あしも引ま
ゆらば路次にて捨られ中なかれ
ばねまふまへくれば雁返れしめ
ぜんとともえをうけつさてが経
ふめぐりゆすがけて君思ひうひか
れ若とぶしめされゆるんさん無き
がみちみて敵に遠なされば雑言の

まふかくらんとす條りふ日影ら
ゆへり是みくか晦うつらんと
是をとさいおれかとさらふてこと
きれさ色うへは錢銷山清さり
陵さく殺う色まよ水を振ち
對よそれはろかも慈まさとつ

ろ悪まり出し給ひやかくらを
りとむまれ菩薩の行骨ある
をの今の夏ふなしくてを終
とおぬまれ草經の七骨となり
かくふる者も夏ふなし三世
十方仏陀の聖衆もあはれむ

ゐある時は亡魂因果のうらみ
[illegible]しとやかくと
ても夕顔のけふ[illegible]く
に[illegible]言れ[illegible]のあ[illegible]
かけて彼縁人と律ひあふて
うの宮に契りなまし
涙

に中[illegible]へ[illegible]く
是よ涙逢[illegible]しく[illegible]長の涙
と涙を[illegible]帯ひ[illegible]られ
ゆへ時雨に涙[illegible]
是[illegible]し
涙に[illegible]や[illegible]へ中ゆく[illegible]

かゝる朝長の御すゑ極く多
はれとも知らずけに六十老の花くゝ
かひし　くん悲懺法よくた
てまつる　御弔ひや法乃山風
月ふけてかく光りやわらく芸
の夜の眠りとさまし給つゝ

時もうつるや後夜乃鐘の声
わかるゝの後の夜もあけ
かへるいとらかふかうりおぶし
きゝねく　其ありかくれ
見んかうやかぢ青墓の長名は
今は西方名なりとは菩提

ふん已ぎ三世利益同一躰ま
となうれば縁うう杯ぬめし
や笑れ妙なる法の功多
今三島　楊枝浄水唯観薩
壇と　仏身をも変ずる変
の瑞風がんおう所にすみわ

かろ　ゆうなりとの用ひやす
至ふしあやかに観音せんかうろす
みくどりしひの法うをかうる
おぼ山麓みまへ朝夕ばかりのこ
よくみそもふかぼ夢うは
ほろしかし　本よりも夢まい

ろみれりろ世なりぞうと 新長
かひとやあひくぞおく浮
とかうし給く ワキ 実くかれふ
まうそてまふも簾ふ清のかそと
ぞひろむの鞍くりく シテ 弥とち
がゝみなりりくされ ワキ 謝乃おめ

ろ シテ 嵐かゝしかと ワキ 不ゝ川
シテ かくれつ ワキ 面白けれ 上音 あれあれと
上 もつてかゝちやききなれ
三 くぐ浮きをひつそ娘とぞひく ヤア
クリ 名なよ松長と書ふおちまゝく
浮枝乃月も影をひく光陰

と婿とりし人や実や時人とぞま
くね寄世の形ひなり惟何
まもらち捨て渉とぞの務
めへやし　それおしよ
紅新あ開くし。世路ふかるると
いて寿旧へまで白骨となりて

郎家かげぐらね　むうしら保
平左右にして朝家を守護し
累ちの代と治めかの武家とあ
ろぞ万機のまつりことをとれほぬ
にふ保元平治の世れされば
かかるはり来りなる　さいさり

おし弓るのさか罷ひとく時
前ざらいなり去かとふ嫡
子悪源太義平ハ石山寺ふても
あしとゞ無勢ふ多勢かなはね
ばらくのう那くいけとられて
いけ誅せられふけり兵衛殿

勝のとけへ源平勢勝ゟ手ふわ
より是も殺へとされたる父
義朝ハ是よりも尾張のうつく
お前さ長田とたのまく
ともなのむ本みのとふ白も
あをやまらしと討きなまひ

ねがふれきは長田は思ひるひか
くくらまゐとまららなてまろ
ろそやびつるれの出宿のおかし
もあつるも女人のひかしく
かなのまれて桜の情のみかり
かゆうふ路までとめぐひ

おなこすれは柳の川の世のら
なりそや一切乃男子とおぼしく
の父となのく男の女人と是く
は母とおへとれ今身の上よ志
らくりぶおのう親子のおと
くふは穀あはかさむひか織ふ

深き御しうげよ弔ひ給へ
なりし朝長が後生をも何となく
弔やるべしあはれしめ色実さ
のむべき一家の運の極めなり
よなきさ木曽の未だ陸奥の甲冑
乃ぬる相そ痛りつ梓弓

本性多なれどもなほまき魂は
若所におもむけども魄は苔
らなよ法川にまうしかうし
ここをそよる狩り抑修羅の
くんとうぜりぬ敵にあひ木比
此世にくみしみ相乃深平

あ家へミこうく上ほとへ白に
さく絵宗のおりまち戦に
運のきはめのうたてさへ大将殿
かく朝長がひさ乃口とのかゝ
よ射させ馬のふと腹り
射付ろまへるとしきりに

なほあうはへ猴とうしてだり
ころひしとされす親義の亨に
まれ一あしも引まさりしとの
まきふかくさのせゝまでらくさ
さは路をたのそく此あなた
かふかりしか雑兵のまにかく

らんよりはと思ひ定て腹一文
字にかき切てそのまゝに修羅
に遠近の土となりぬる青野が
原のなき跡弔ひて賜び給へな
き跡弔ひて賜び給へ

右之本者観世太夫章句真本今版行畢
正徳六丙申歳弥生
尓来荏苒数十年ノ星霜ヲ経ルニ従ヒ改正増補ヲ加ヘ
シモ印刷ニ附セサレハ之ヲ世ニ公ニスル能ハサルヲ悲ミ今般
宮内省　御用達観世清孝ノ校合ヲ以テ茲ニ之ヲ上梓スト云

明治十三年三月三十日出板御届　定價貳錢
同　年五月　刻成発兌
京都府平民
出版人　檜常介
上京第三十組二条通寺町西入
丁子屋町三十五番地

出版人　京都府平民　檜常介（下京第三十組二条通寺町西入丁子屋町三十五番地）

明治十三年三月三十日出版御届

同　年五月　日刻成発兌

定價[illegible]銭

宮内省御用達観世清孝ノ校合ヲ以テ新ニ之ヲ上梓ス

ミテ印刷ニ附セサレハ之ヲ世ニ公ニスル能ハサルヲ以テ誤謬ニ合般

元来謡本ハ数十年ノ星霜ヲ経ルニ随テ誤謬ヲ正シ増補ヲ加ヘ

正徳六丙申歳　[illegible]　生

右之本者觀世太夫章句真本令版行畢

姨捨

月に名ちる死あさましや

姨捨山となりにけり　別[illegible]

は老人あうとふ住居住れ共

は我いまも又科の月をみて

わとふ此杖にひ立姨捨山へと

急ぐ山路の末ならし旅居のか
草枕しばし又さら川の中宿
の嶺し暮して行旅に宿
名にあふ更科や姨捨山に着
きにけり〱

ワキ詞
扨も我姨捨
山に来て見れば嶺たいらかに
して万里の空も隔てなく千
里にくまなき月の秋さこ
そと思ひやられて候いかさま此
所にやすらひ今宵の月を
ながめあかさばやと思ひ候

シテ女詞
なう〱
何者なる旅人の何事を仰せ候

そ　男「さんげ〳〵色ハ数乃若まくげ
の袖て清水に落りくげ梅く
乃身をハ川くよ清人そ　女「色ハ
この清ましの里よ清君を
結きハ名に於秋の数ハく
るで見く月の名みせ浮まて

まそみ天乃原ハ霧ハ之四方君
けしきう数ハいうふまでよひの月乃
面白かりんとうらん　男「梅ちさとし
数乃人そてまし清乃や梅く
いろくへおもそての住所へいつく
此後まそゆそ　女「おもきそて山のか

そ　〽男さんは是は桜乃若りまくは
かゝ袖で此所に来りくは桜く
隅田川くよ住人ぞ　〽女是は
この梅若乃塚よ梅若を
法喜の名に於杉の枝のかく
るしを忌く月の名残まで

望そふ天乃原ぱ名たる四方共
けしきはいうふまよひの月乃
面白かりんとらん　〽男桜さきし
桜乃人ぞまし徒やゝ桜く
いろくあしそての住所いつく
此程まそほぞ　〽女かしこそ山のか

こ紀とどろ臣捨てられし跡わ我（下）
こゝろ慰めかねつさらしなや姨
捨山にてる月をみてと詠せし
人のあとならば是に見えたる加
つら木のかげこそむかしの姨
捨のそのなき跡にて候へとく

（甲ヒル）さそハ此木のかげにしてすてを
かれし人乃跡の（女節）ゑ傳へ草
ふうりれさぞりぬ世とて今ハ
をや（甲ヒル）むかしかたりになりし人
のぶかど跡んやのこりなんか（シテ）猶き
ふやゝともおもせん（甲ト）猶とさ

ふきおろすみね風も身に
しむ秋のころ今こそわか
なくさめかねつさらしなや
をばすて山の名もおなしかう
らも ふるきのかみりをのと
おて秋のかれのゝたや色つくひと

〽山かとよりもならはぬりの色
すゝしく雲つきてはれて山
のかけしきかれくなき人
わらつくより来てなかめおく
はきれならんもゆきとて数のも
みなくひかさらしぬ乃月とう

けふのみかよひはしめて此所也

きこしてはしく　女「桜はこゝろやさしの

人そ惜しまれぬや、けにあはれ

わかみも月と共にかゝる道芝て

籠人の桜花をなくさめ申し

ワキ「そのや桜花をなくさめんとは

ゆかりはいかなる人の身ならん　女「誰れ

よそねれきこえもかの老　ワキせん「さてそ

いかひろかたり　女「桜といひそんれこ

乃山の　ワキ「名こそ　なひるか　女「嫉

もとの　下　上歌「さてたとへそんもなら

うしや　がためしもへも捨ら

陽隆

まてはなくひとりぬる山のよもよもつ
きみ名乃秋毎に物思ひのやさ
と晴さんと今宵あつかし虫よ
野もと虫鳴乃声の音ふかき露あ
をあうふう世ふかうく
夕うけをき月かけの空な

や虫もあく面白や萬里の空も
くまもなくくもりつくの秋も清て
なき人もすみて秋もすゝこ
ぬ夜中れ新月の色二千里
外の故人のこころ荒面白乃
秋うやおかしおり秋のとうか

らや暇かまさ秋の半もなかへ
し今宵此月の於しきのか
かざあさらふ秋待ちてなく
ひかる名とら月乃見るふ
もおれゝなる後よかかる姨捨
て山乃秋の月猶嬉ね公や

都よたりも思ひねや　ワキ　ふしぎ
やな。はや更くる月の夜ふ白衣
の女人あらはれ給ふハ夢うつゝ
か。おぼつかな　シテ　夢とはなどや夕
くれふあらはれ出し老のすが
た恥かしなから来りたり　ワキ　何と

かくし給ふらん本より所もを
ば捨の女山は老女が住所乃ワキむ
かしにかへる秋乃よの女月の友
人まとゐしてワキ草をしき女花
におきふす袖乃露のいかなる
これ故捨の人に心を慰めて
らくあや歳ふける女郎花
のゝし家夜志ほゝれてむかし
に捨られし程乃身をしらで
又姨捨の山に出て面をさらし
なの月にみゆるも恥かしやよし
や何事も夢の世乃中にいはし

思ひしや思ひ白菊花にめでゝ月よ
ともみゝくかぞこん　実や興に
ひかれて来り興尽きてかへりしも
今此おもふと来にける今宵のそ
らの氣色　殊に月乃名と
こゝかしこのあまたと更科や姨
捨山のくもりなき一輪みてる清
光の影團々として海嶠をはなる
る　然れば諸仏乃御ちかひ何れ
勝劣なけれとも超世の悲願あまね
き影弥陀光明に如くはなし
〽去程に三光西に行事は

殺生悪して西方にむかいを
くらみとうやみ月に彼此来世
乃縁縁ともに縁となる縁にこゝら
ひきおとの死骸をかりとる天
上乃かたをうる故に大勢よ上ならぬ
すとう天冠の首ふ花の光りかゝ

やさだまのらを殺す数々に悪業
の毒ありとど悪人を助くる乃
うせのおもひ糸ちるの毒ふ乱
とりふんびるかるもゆりから
ゑてよ唯日し数寶乃浪の迦
ぶらつや雅ろ末乃花らりて紫

上

身をはりふかきよりも如寺う

都鄙乃たらひ船きむとたくへ

てを引よりふ乱薩あふむの国

しくさへ漂るゝれそのつゝ

光ものけもそし船へくぱ身ね

うきまも船きふ乃るゑ辺光上名

伴くりぱたれとも雲居のおるは

いかをみゐ文ゐはかりけかゝる

船ゐてん為んの世亦れさてあ

乃船さと志めへなりむかし

こひしき船のそて被て

乃船くさめうねつぱしや

をば捨山に照月を見て〳〵
月に馴花にたはふるゝ秋草の
露のまに露のまになか〳〵
何しに現はれて胡蝶の遊
たはふるゝまひの袖　かへせやか
へせ　昔の秋を　思ひ出たる
まうしうの心やるかたもなきこ
よひの秋風身にしみ〳〵と恋
しきはむかし忍ばしきはえん
ぶの秋よ友よと思ひをれども夜
も既にしら〳〵とはやあさまにもなり
ぬれば我もみえず旅人も帰る

行とふ獨捨られて老女か
むかし社あらめ今も又をは捨
山とそなりにける姨捨山とそ
なりける

右之本者観世太夫章句真本令版行畢
　正徳六丙申歳弥生
尓来荏苒数十年ノ星霜ヲ経ルニ従ヒ改正増補ヲ加ヘ
シモ印刷ニ附セサレハ之ヲ世ニ公ニスル能ハサルヲ悲ミ今般
宮内省　御用達観世清孝ノ校合ヲ以テ玆ニ之ヲ上梓スト云

明治十三年三月三十日出板御届
同　年五月　刻成発兌
定價貳錢

出版人　京都府平民
檜常介
上京第三十組二条通寺町西入
丁子屋町三十五番地

右之本者観世太夫章句真本令版行事

正德六丙申歳　[illegible]生

余茲ニ其數十年ノ星霜ヲ經ルニ據リ改正増補シ加ヘ
然モ中間誤謬サセレハ之ヲ世ニ公ニスルヿ能ハサルヲ悲ミ今般
宮内省御用達観世清孝ハ教令ヲ以テ茲ニ之ヲ上梓スト云

明治十三年十二月二十日出版御届
同　十四年五月　刻成發兌

上京區第三組下立賣通[illegible]町西入[illegible]番地
出版人　京都府平民　檜常[illegible]

シテ 次第

三井寺

南無や大慈大悲の観世音さしも草さしもかしこき誓ひの末一称一念猶頼もしとや此程日を送り候ところたゞ頼めの末頼もしとのそかひな

たゞんどのもんぞいつかなる勝く
おくぶびたのかげ赤節とかなり
ねらんく振るあはなき
だい花咲色くれなゐのつゆが
生さ君をあらみとりてあふべき度
なつとかゞ逢ひさらんし世の緒

やはらぎしすいゑんの間よお
らきあら京家と影りてはいい
うふわられをいつもとひ燃むる
人のはあつまり集りゆへうし欲
らとやとわのひはしかく惟つま
あるしすいえんのうらふあり

ミすつの霊夢を蒙りて候程
ろふあらんとおもひご三井寺へ
まゐれとあらたなる御霊夢を加
ふむりて候（レカ）荒ら行しと御あ
わ世は猶ゝ若ふままに世ゝ二
井寺とやらんへまゐり候へし

（ヨワ上）
秋も半れゆく月に
なやいそくらん　（ヨワ行）是は湖見簟を
城寺乃縁偈とては文是て渡
りはなきかれ人は思ひ偈ふ教む
よし候常がなく脚勇のけ
いやくを那しゆるは文を桜の

八月十五夜明月のもとにて秋よ
おもしろき人とともにあひやさしく
綠堂の庭よ出て月を詠め
衣やとおれたゝひれさ庭を
望月乃空月とてかしへを
思ゝくなき夢の夢ゝぬるを然

とりふさ雲をいとふや影より
此花名たかのむ日うけかく
雲なかりし幾度袖を拂ひまし
花のふゝきと思ひし志賀
の山越らるゝ跡のまゝ
湖のかほる法忍乃山なのく

よるねわしれ山のしん
とかめのあふあひしよき
をかしれぬるやか紅ふ々あり
身なれば秋れりのふ程もよか
かいや秋なかつ過りなりけりの
ある數やらく數とふもかれ

なのれれあらそうし袖をや
人乃おやとあてふふしかし
いそとつる紅れ紅ともなし白
いつ乃紀きしや程ふん
老の杖と捨てゆきし月あは
さすや程やかへるとまで

人乃家のあるじ花も紅葉も
月も雪となるに秋の月ある
なつかしの松も待よかゝし
いさ去雲に晴し露
かゝ濱や寿のかけ待のひとつ
松こそ残りま乃たくひなく松
風になびく松の色も今ぞ
いさゝらし櫻さく春ものは花
その里とも今まて松ま吹風
あさ清き秋乃水に三井
寺に名残る三井寺なれや
く聞きに残り　撞れこめる

云人の業名高き月にあると
かねてハ此本院にやとへく
かし莫しうまひハ三五夜中
乃新月の色二千里乃外の
故人の心水の面にてる月な
三をかそふれハ秋もなかの秋

とかやいへハ面白や月
かは山風に時をに鶴乃海もし
ほと霊隷の東にて海こし
此かたもりに親かりと月
かまへ乃鏡山やま田やと色
の渡しみの秋ハ為人かな

朔乃勝れてハとめつらし能色こ
くれてこそ出し人も人もこゝろハか
らん　面白の鐘乃声や我
ふるさとにてハ清見寺の鐘
をこそ常ハ聞馴しに是ハ又
さゝ波や三井の古寺かねハあ

れどまことむかしにかへる聲ハ聞て
げにや此鐘ハ秀郷とかや
の鐘ゑらりて取て帰りしかを
されハ龍女が成佛の縁に波
うもゝ我もかとか縁をつくへ
きねり　鐘かきれうし撞木

てく月はかや鐘の音もへ
やあしばらく狂人の身にかく
何とて鐘をつくぞとよ曲者の
ゆへ　女　よし夜半の楼にのぼりし
も月に縁せし鐘の声なる
なきかめ　ワキ　されば古人の
ことばなれ共狂人の身として鐘つく
ことあるまじきぞとゞめぬなるぞ
ことさらとよ　女　今宵の月にうそ
ぶくすがた狂人とてないとひ給ひ
そ待にいつも鐘はさして
詩歌をとなへまゐらせんとて

うんをとり川ば媛わなうり
しらば明月に向つて心をとと
ゆつくば今宵一輪ことも澄まし
いつまでの秋ふかのかうしんと成
とまりけてあまりれらし
さふん乱るる様にのつて

かなさとつくつくつのふとせうめ
しふ是結程とこふが程の
西人感しなほ月もまた乱るく
心あり候しきや枝さ弥女が
まいはなしつつや人によが
んのうれ夢を覚まさや浦のま

らをと数ふる初夜の鐘をつ
く時ハ諸行無常とひゞく
なりや後夜の鐘をつく時ハ
是生滅法とひゞくなり晨
朝のひゞきハ生滅々已入あ
ひハ寂滅為楽とひゞく

わこひのあはれなる乃数月と
数をひく百八ぼんのうの結
至みれぶと驚く夢の世乃迷ひ
もはやつきなりや後夜の鐘
われも我も五障の雲はれてしん
によの月乃かけをながめあかて

咲かん　クリ 夫長楽の鐘のこ
ゑは花の外につきぬ又竜
池の柳乃色ハ雨乃中にふかし
サシ ことに宴をよそる人の字栄の
ともしのかねてきく名を
高砂の尾上れうゑの聲かけて

秋の声もぞくもらか月とこなり
くれ竹の夜もすがらしづかなる
下 名にしおふかき鐘乃おとしはせきまで
や浪の数なりけん　山寺の
はる乃夕ぐれきてみれハ入あひ
のかねに花ぞちりかゝる實

おしかたる船と夢のたゞよひゆく
まなくんぱがわあつきのかも
只と情むきなくのうこと
たなる猿わも松のかやひ
むくゝん文綺羅ふけ田く
かるれたまけわあわわれ

のるへあのらやう色のせしこゝろ
悪路のたよりのかよひまいの意
思と学梅を文こゝに花にも
覚わとふる花を今ぶひねの
夢なかと船とこ心の迷しぶ
此うなれつくしゝぶひと学

暁とりつの時ならくへまし
月おちからす啼いて霜天にみちて
冷しく江村の漁火もほのか
に半夜の鐘のひゞきは
客の舩にや通ふらん蓬窓雨し
たゞりて馴れし汐路のかぢ枕

浮寝ぞかはる此海は波風
も静かにて秋の夜すがら月
すむ三井寺のかねぞさやけき
いうふかへきられは　絲ゆるそ
ゆそ　思ふる柏らひの気さと
とさめくまりゆく　是非とひも

よく〳〵見申をとめりし物かれざり
船のうちやと見るれハひとつ〳〵渡
いつせうはすみにて候へいうふ是なる
狂女なことの国里ハいつくの者
にて候ぞ　女 是ハするかの国清
見か関乃者にて候　子セル 紛のゑ清

見か関の者と申候　シテ同 あら不し
ぎや今物仰られつるハまさし
く我子れ千満殿こそめま思
めつらしや候　ワキ 如何に是なる狂女
いそこ川なるみをとゆ者かあさ
まれハてそ物くるひにて候　女セル かふ

是れ極まれうつろねりのとも極ふ
枝を別れもへあかす時ハ猶し
みらひへきぞいはひ侍うしく
秋のよもはれ侍まれすそ秋のと
ゆくもとちぬさしみとゆかいそ
ひくのえゆく　あいうありや

きのこかわすゆひて　うねる
ぬるやまふ出のひてらは上れ
まつとくよ　ゆみ雲ゆへ　今れ
かくていむへき秋ハすうかの
雲清人の寒れ老なりしらく
東人のまふわたりかれ末ふ

有なる母上様と君のしく
か様ふらひ出の人とれ夢も
我ハ志らぬなり（女下）まとわれ
も知ふらずふすがの明へふわる
まし教なれ遠あひみから
行しさのまし（中）やて（二ハル下）母よと於

のうう我子此面ふ色のまと
（せん）子孫ふ迷ふ親の身ハぐらしを
人のもと守ハ（上ロキ状）（ウ）あら痛ハし此
叱るや金ハめとはふよゐ親と
辿と祝ひのまへし（女上下）嫁しなり
らもおとろへるがはハさん立川

うしめりて條まる縁は實
逢がるゝ親と子みれど縁は盡最
契りふかく日社多くにをし
も此三井寺に迎りまで親
子に逢ふは紀放ての縁乃こく
ふそく物狂ひのみそとておもふ

めでたし四へあれは當の契りけれ
別の道といひしに親子の名
の契りけれ道四へにおやよりの縁
し此道のそれかて得ひと
ち悩りし親子に此契りつきせ尽
も寶業の家となりにけりに

三井

[illegible]寿のめぐみをも
たから[illegible]
[illegible]

右之本者観世太夫章句真本今版行畢
正徳六丙申歳弥生
示来荏苒数十年ノ星霜ヲ経ルニ従ヒ改正増補ヲ加ヘシモ印刷ニ附セサレハ之ヲ世ニ公ニスル能ハサルヲ悲ミ今般宮内省御用達観世清孝ノ校合ヲ以テ茲ニ之ヲ上梓スト云

明治十三年三月三十日出板御届
同　年五月　刻成発兌
定價貳錢
京都府平民
出版人　檜常介
上京第三十組二条通寺町西入
丁子屋町三十五番地

（丁子屋町三十五番地 上京第三十組二条通寺町西入）

出版人　京都府平民　檜常介

同　年五月　　刻成発兌

明治十三年三月三十日出版御届

宮内省御用達觀世清孝ノ校合ヲ以テ茲ニ之ヲ上梓ス十有シテ印刷ニ附セサルハ父ヨリ世ニ公ニスル能ハサルヲ悲ミ今般尓来殆其数十年ノ星霜ヲ経ルニ従ヒ改正増補ヲ加ヘ

正徳六丙申歳　秋　生

右之本者觀世太夫章句真本令版行畢

阿漕

次第　こゝろつくし乃秋風に木のまの月そすくなき

ワキ詞　是ハ九州日向乃国の者にて候我いまた伊勢太神宮に参らす候程に只今思立て候

道行　日に向ふ国乃浦浪立

出て行く八重の塩路をたどる〱と
行らし須磨浅須磨かゝるあるの
あつまて椿の梅見ととも夜の浦
関のと音に聞くれくは濤の浦に
見にくりく　急候程に是ハ
はや伊勢の国あのの郡とやらん

やは浦人を相待ち所の名所を
も尋ねやと思ひ候　（一セイシテ）波あそぼ
ゆ際とあさまあま夜がのあさい
はとぞほらまし　（サシ）それ世を渡る
ならひ我一人にかぎらねどもか
ゝる職をいとなむ因果なかりしハ

かく浅ましき殺生の家にうまれ
あけくれ物の命をころす事のか
なしさよはかなかりける殺生なれ
とは思へど浮世のわざにて候よ
今日も又網に出でて候ワキ「いかにこれ
なる尉殿に尋申べき事の候シテ「此
方のことにて候か何事にて候ぞワキ「伊
勢の海遠よりても此浦をといへる
所と申候てシテ「さん候此所をば阿漕
が浦と申ワキ「扨は歌に及ぶるあこぎが
うらにて候ひけるぞや古き歌にいせ
の海あこぎの浦に引網もたびかさ

なにはあしかれよそりが様によまれ
し浦あるとてや藻塩たれーーー、侘やは葉
やさしき旅人や、雨の和歌をあまは
なかゝらん申してくさ、彼六條のうち
み逢ふ身もーー、ーーあはれ見る浦にーー、引くあまも
殘くさきあはれあはれやせんがためよ

よまれしあま人なれば汐を汲なれ
世との海士れがなるものをかゝる身なれ
まへとて、織しき絵ひはなよ　実や
ーー、ーーーー、ーーー、ーーーー
名高きうたしに訓し手へは紀あはさ
ーー、ーー、ーーーー、ーーー
ゆまみのなくりの夕そめり　身とく
ーーーー、ーーー、ーー、ーーーー、ーーー
つきさまのあはれ孫とも　すあへは雨にふる

波乃音も松かせの　寂しく　夢の
名も所によりくかへりくかつ網
波の声乃浦の世も、家まの世れ
須あ乃の夢をえく哀れめかや
く螺色今ハ絶ふなり月えとれ
お波のしわさかとゆるされ中なまこ

ろかな霞浮ふよりく數人あまにより
くのる歌さ　此うたをあこきの浦
と申いふ迄の極うろひく　抑して
此浦と申ハ伊勢太神
宮御降臨より此かた御膳調進
網を引所なりされハ神の御誓ひ

によるにや海辺のうろくづ此所に多くあつまるによつて浮世を渡るあたりの蜑人は此所にすなどりを望むといへ共神前のおそれあるによりかたくいましめて網をゆるさぬ所にあこぎと云あま人がわざにのぞむこゝろのかなしさは夜ゝ忍ひく網をひくしばしは人もしらざりしに度かさなればあらはれてかの者をいましめてともうへば此浦の沖に沈めけり

下 されさなふい世とれあ業の罪深さがを苦しみの海のおそれも守てあめ死

はゝところどゞ変るや冥途のみちとても
（下ヲ冷）声やいふそれ名のかしなれ今ともあらん
うらみかしやかしやこれ責も深かく
て苦しみも度うきある形とむしろ世
うへやかへ利うやいふしへを衛るも
かまりなふかあらぬうらぬ名めし人

別れあらき世うらみれ是こそ不帰本乃
数積りて無乃契り無念これあれ
うたよへうぬ名こ別れ別清と哭えし
まき人の無為あらぬくといひ乃
も責人一人不度生あるそかなしき
吉義
字かしやさとの出来乃ぎまやろうある

七

らなられて執心乃浦なきれおと
となりゐる値遇られ　一樹乃かげり
とも他生乃縁と云ふものと思ふもさ
されば世の値遇とはいふ　松風の浦
なきてうへ墨衣　月も夕ぐれの袖
なかむり立そふる〳〵や須磨乃　浪もほ

のうみくそふく　海辺もうつ村
寄おともやまくられ　おもひの
あかり遠しくらく〳〵しらなみよ
もとえしよりも織かとやてふさ
うみつつ晴くかき暮て志ほ浪も
しほをひ浪のとをし　消うせて

ろともいふとさりよ夢の波よ雲

えしかりふてあとかたもなくならせ

おさへふりく　いさとりん散く

乃がし浅の中にも一葉の妙な歌

花のひともとて苔の露りの玉か

られ絲にひかれらるかなし

初重下
あはれかかるのふもと雲井秋かると

書き社にわかな世を恨らし今宵

わきとし涙あまてに胎の數のあと

はまさひらしぬるよみ傳なりや

夕月あれは宵よりやうて入塩のそら

とう人めと思くよ引あみの沖

一の巻り

かゝる磯まもねらみくる佐竹のミ
それ海おとろの埋木うとせ
く猶執心の網を舟伊勢乃
うらゝ渚あさきさ乃とゝ海くと
ともし火より法乃家耳まかき
けせ於かゝれ悲死とのくちら

あこれ溜れかへつて篝火と成るぞや
何かあつやたへうやうしろうる
る夜乃暮しぞや因果の如く
り来る火車に業をひく若しめ
く月乃まへの地獄も様なりきふ
おそろしのりやあのかも

うらめしのかしへう月しや志やとれ
名をとらえしかゝる志れらしかゞを
志うしんのかひくあゝのまか起
しら縫ふ川つまいう人川要矣
あ魄とぬつ紅蓮大紅蓮の氷
わ身といゝ九骨をくたけとさみ

ふつさしを志よう徒川大焦熱れ
焔のほむらをこりなら原ふひま
をわすさめゆれ巴免もなひかを
なるおそろしの浦乃はみさうとた
すみますへや様人よなすけさ
まへやなひ人とてまさわくよ

[illegible]なかみ乃[illegible]
[illegible]け利

182
22
157

右之本者観世大夫章句真本今版行畢
正徳六丙申歳弥生
于来荏苒数十年ノ星霜ヲ経ルニ従ヒ改正増補ヲ加ヘ
シモ印刷ニ附セサレハ之ヲ世ニ公ニスル能ハサルヲ悲ミ今般
宮内省御用達観世清孝ノ校合ヲ以テ茲ニ之ヲ上梓スト云

明治十三年三月三十日出板御届
同　年五月　刻成発兌
定價貳錢
京都府平民
出版人　檜常介
上京第三十組二条通寺町西入
丁子屋町三十五番地

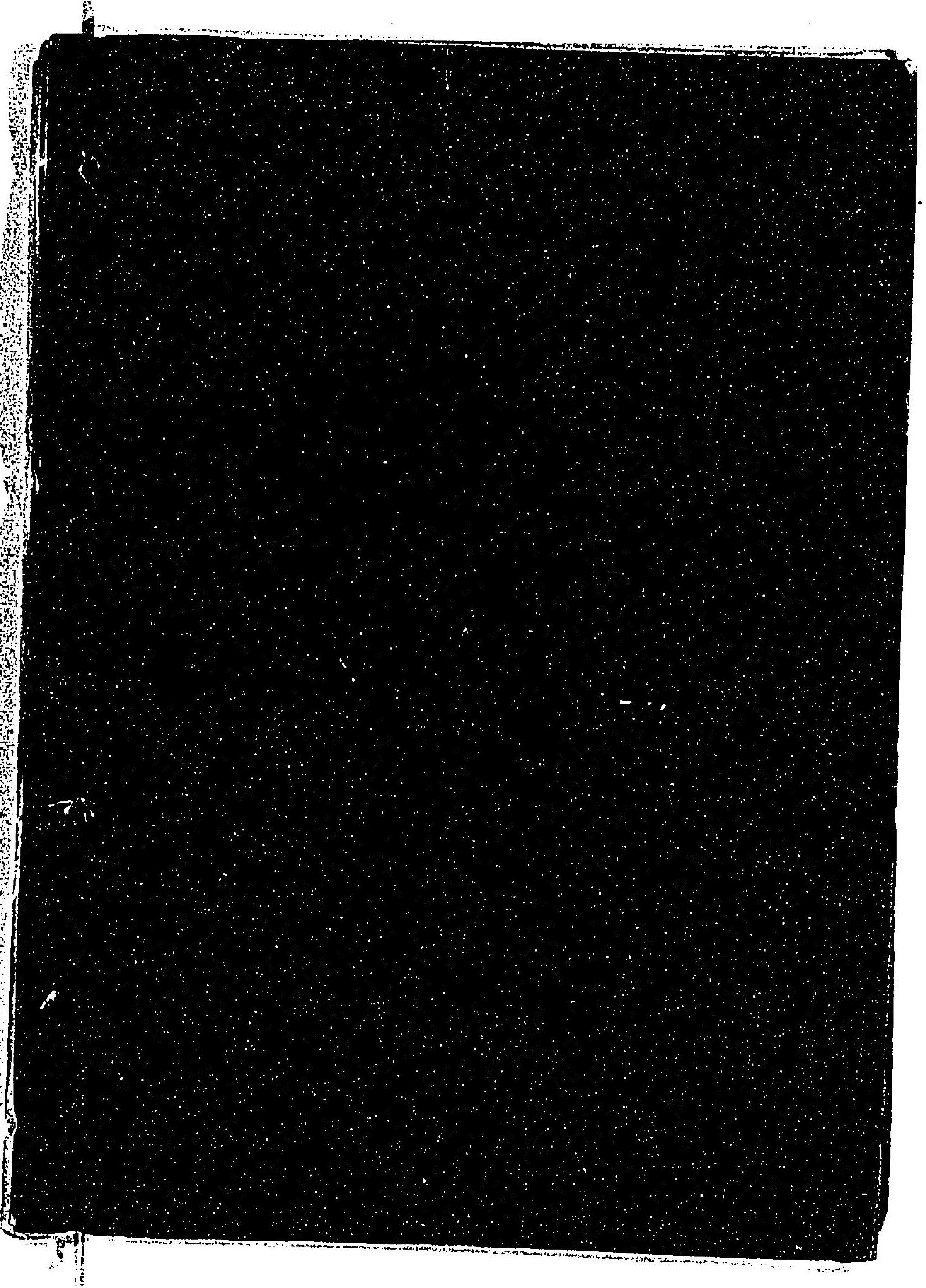
いろふかり海となみ乃そこに
いりにけり

右之本者観世太夫章句真本今般行畢
正徳六丙申歳弥生
尓来荏苒数十年ノ星霜ヲ経ルニ従ヒ改正増補ヲ加ヘ
シモ印刷ニ附セサレハ之ヲ世ニ公ニスル能ハサルヲ悲ミ今般
宮内省　御用達観世清孝ノ校合ヲ以テ茲ニ之ヲ上梓スト云

明治十三年三月三十日出板御届
同　年五月　刻成発兌
定價貳錢
京都府平民
出版人　檜常介
上京第二十組二条通寺町西入
丁子屋町三十五番地

182
22
167

182
22
157

東京圖書館
~~和書門
音樂遊戯類
二〇函
四架
一〇四號
二二冊~~